染井野小学校避難所運営訓練に参加して…

～まず、避難所の状況を確認してから、各々の震災対策を考えるべきではないのか～

今回の避難所運営訓練には、１００人を超える住民の参加がありました。やはり、正月の能登半島地震の影響があったものと考えられます。被災した住民が避難所で生活せざるを得ない状況をみれば、「うちの街は…、避難所は…」となります。そして、避難所のわずかな備蓄品、避難民に対する誘導や様々な準備をしなければならない状況を知り、大きな不安を感じてしまう…。それが、訓練の一つの目的ではありますが、それだけでは前に進みません。

佐倉市の対応を促すだけではなく、自分たちでできることをまず始めなければなりません。それが、この訓練の目的の一つでもあります。

住民と佐倉市職員による真剣な話し合い

～主な訓練内容～

1. 防災倉庫収納物開示（危機管理課）
2. 防災井戸稼働（施設配備職員）
3. 防災倉庫等より必要物品搬出
4. 男子用小用トイレ設営（穴掘り、テント設営、目隠し設置など）
5. マンホールトイレ設置（施設配備職員に協力）
6. アリーナ前トイレの便袋等の設置

※ その他に、トランシーバーの操作テスト、受付設置などの作業も実施

訓練に参加して、初めて分かることが多いというのが現実です…

今回の訓練を通して、たくさんの住民が参加してくれたことが大きな成果と言えます。防災倉庫の中身の少なさや避難生活を送るためには多くの作業が必要であることに気付いた住民も多く、防災意識が高まる経験になったと思います。

訓練を計画したまち協にも、訓練の作業内容の確認や進行のスムーズさに欠ける所もあり、改善点が数多く見つかるなど、やはり有意義な避難訓練になりました。

佐倉市職員の方々も、参加住民の積極的な質問に対し、誠実に対応しようとする姿勢が見られました。今回参加した住民の皆さんの声に対し、防災備蓄の増加や地域の防災活動への積極的な支援などの具体的な形で応えることが行政の責任でもあります。

「もし今、首都圏直下型地震が発生したら…」と考えると、より多くの住民が参加する防災訓練を積み重ねることの重要性を痛感した訓練になりました。

張り出された避難所ルール
参加した住民の方々がしっかり写真に撮って保存

避難生活の中心体育館
佐倉の冬は最低気温が氷点下になることが多い

男子小用トイレ作成作業
10cm 掘ると瓦礫が大量に出現し掘削不能に…

『誰にでもできるボランティアの魅力』セミナー報告

2023/11/8（水）14:00～16:00　千代田・染井野ふれあいセンター

ボランティア（英：volunteer）という言葉は老若男女を問わず誰でも知っていると思います。しかし、実際にボランティアをしている人はこの地域で何人くらいいるでしょうか。

「ボランティアに興味はあるけれど、どのように始めたら良いか分からない」「世の中にはどんなボランティアがあるの？」こんな疑問に答えるべく令和5年11月8日、『**誰にでもできるボランティアの魅力**』と題してこのセミナーは始まりました。

今回、講師としてお招きしたのは「佐倉市市民公益活動サポートセンター塚本貞仁氏」、「佐倉市ボランティアセンター菅野夢佳氏・菅原喜美恵氏」、そして、個人ボランティアとして活動している本間達氏、高野富佐代氏（ゲストスピーカー）の4名です。

佐倉市市民公益サポートセンター
塚本貞仁さん

まず、塚本氏による「佐倉市 市民公益活動サポートセンター」（以下、サポセン）の説明です。サポセンは、市民公益活動を行うすべての人を応援する施設で、「誰かの為に何かしたい、役に立ちたい」そんな人たちの交流と活動の為にあります。

所在地は佐倉市鏑木町 198-2、ちょうど中央公民館の隣に位置しており、ここでは市民公益活動（ボランティア）を行う人たちのためにコピー機・印刷機・パソコン・会議室など（一部有料）が用意されています。サポセンにはボランティア団体の登録制度があり、登録団体には優先的に会議室の利用が可能となるなど、他にも活動資金に関する部分など手厚いサポートが用意されています。

また、「サポセンだより」という広報紙を発行しており、サポセンが企画する様々なイベント（スマホ・アプリ講座）などが紹介されています。

興味のある方は一度サポセンを覗いてみてはいかがでしょうか。

次に「佐倉市ボランティアセンター」（以下、ボラセン）です。ボランティアの語源はラテン語の「ボランタス（Voluntas）」で、本来の意味は「自由意志」。そして過去、戦乱の続くヨーロッパで「自警団」や「志願兵」という意味に次第に変化し、今日海外では「自発的に行動すること」という位置付けでこの言葉が使われています。日本でのボランティア活動状況は1980年4月の約16000団体（160万人）から2011年には190000団体（867万人）へと推移しており、2022年には175046団体（667万7675人）となっています。

ボランティアの心構えとしては、「自分の意思で行動する」「で

佐倉市ボランティアセンター
左から菅原喜美恵さん、菅野夢佳さん

きることから始める」「約束を守る」「プライバシーを守る」「相手への心配りを忘れない」「無理のない活動をする」「活動を振り返って記録する」といったところです。ボランティアは強制的なものでも義務でもなく、無理をせず自分ができる事から始める事が大切です。また、一般的な人間関係でもそうですが、約束や秘密は守りなにより活動を継続する事が極めて大切となります。

ここでボラセンの紹介ですが、ボラセンは様々なボランティアの相談や活動を紹介するなど、研修会も開催しています。ボラセンでも広報紙「ボランティアセンターたより」を発行してボランティア活動の普及に努めています。

ボランティア
本間達さん

最後にゲストスピーカーの方に経験談をお話いただきます。

個人ボランティアの本間さんがボランティアを始めたのは、2011年6月に佐倉市の広報に載っていた移動サービスのボランティア募集の案内を見た事がきっかけでした。移動サービスとは、「誰でも、いつでも、どこへでも出かける事のできる社会の実現」を目的として行われています。

利用者は現在40名ほどであり、要介護や要支援者などの方もおられるようです。メリットとしてはタクシーの半額程度、更には病院などの目的地などの中まで付き添いを行うということです。ボランティア活動を行うきっかけとなったのは、視力を失ってしまった父親の手助けをしていたからではないかと思います。今でも、デイサービスや移動サービスなどで目の不自由な方へのご案内は過去の経験を活かし比較的に気配りができていると思っています。

ボランティア活動でよかったと思うことは、毎日外へ出ているので人と接触し続けているという事で、これがいつも家にいるとボーっとしていた気がすることからもボランティアが健康維持に役立っているのではないかと思っています。皆さんも１歩踏み出しましょう。

個人ボランティアの高野さんがボランティアを始めたのは26年前。夫を病気で亡くした頃、当時の小学校の校長先生から「家にこもっていても仕方がないから、少し外に出てみない？」と声をかけられたことがきっかけでした。翌年からはPTAの役員をやりつつ、主任児童委員や民生委員も始めました。今思うとこれまで多くの人たちに助けて頂いたことから、今度は自分が何か恩返しができないかと思うようになりました。

ボランティアを通じ、皆さんのおかげで身も心も広がりました。たくさんの人と関わり色々な境遇を知る事で人に優しくなれ、今までになかったような感情も芽生えてきます。もしかすると、ボランティアは人との繋がりのためにあるのかな、と思ったりもします。これからも皆さんと一緒にもう１歩踏み出したいと思います。

ボランティア
高野富佐代さん

本間さん、高野さん、お話有難うございます。ボランティアを始めるきっかけは様々なんですね。

ボランティア活動では、多くの人との出会いや経験を通して、喜びや充実感、達成感などを得ることができます。また、新しいことを学ぶこともでき、自分について新たな発見もあります。

大切なことは、「楽しく、無理なく、継続的に」活動することです。あなたもそろそろ動き出してみませんか？

この町は大丈夫？
大震災に備えて

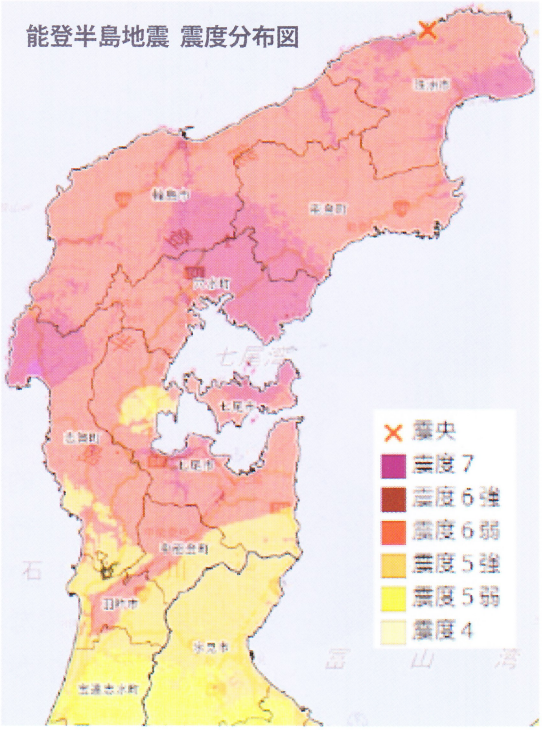
～大震災に関する情報を紹介～
改めて考えさせられる、地震の恐ろしさと厳しい避難生活の現実…

No.8

２０２４年１月１日１６時１０分　能登半島地震発生！ M7.6 最大震度７

正月元旦に発生した能登半島地震。その被害の大きさに驚き、支援の遅さに落胆する日々が続きました。

震源付近の珠洲市・輪島市の人口は合わせて４万５千人程度。佐倉市の約１/４。避難所に避難している数は、首都圏直下型地震で想定している数の１/２００程度。これなら、さすがに支援の手が現地に届くのも早く、過去の教訓を生かした支援活動ができるのではと見守っていると…。道路の寸断による支援の遅れも理由ですが、思わず「ヘリはどうした！」テレビでは、災害の専門家による新たな視点での解説が続いていた。



災害関連死と二次避難という新しい問題提起が…

熊本地震の資料（左図）を見ると、熊本地震での死者の約８０％が**『災害関連死』**。さらに、そのうち**自宅で亡くなった人は**、災害関連死の３７％。この数字は、**地震で直接亡くなった人よりも多い**ということになります。

モーニングショーのテレビ画面

家屋倒壊での圧死、火事での焼死を合わせた死者数よりも、自宅で被災生活を送っている中での死者数が多いという厳しい現実。災害時だからこそ、人と人とのつながりが大切、お互いを見守る気持ちが必要です。

多くの家屋が倒壊した石川県珠洲市

地震で倒壊したビル（石川県輪島市）

地震で倒壊した金沢市の住宅

穴水町の陥没した道路

「輪島朝市」付近で捜索活動する警察官ら

穴水町で避難所となった向洋小の教室

水が出ない！遅れる水道の復旧…

地震発生から約１か月半が過ぎた２月１４日時点での断水は約３万戸。輪島市と珠洲市はほぼ全域で断水が続いている。

電気が早くから通っていても断水しているのは、水道管の検査が進まない現実があるからです。全国から応援が入っていても人手不足。古い水道管も一因。

首都圏直下型地震を考えると、「電気が来ても、断水がいつ解決できるか分からない」という覚悟をしなければなりません。

『防災特集号2023』の訂正

前回配布した『防災特集号 2023』の P3 に、「ブッシュ型支援」という表記がありました。正しくは、「**プッシュ型支援**」です。訂正させていただきます。ご指摘して頂いた読者の方、ありがとうございました。

※**プッシュ型支援**…被災地の自治体からの具体的な要請を待たず、食料や仮設トイレといった必需の物資を緊急輸送する支援方法。

プル型支援…自治体側から要請して、支援物資を支援してもらう支援方法。